

1830年頃におけるファッションプレートが語る女性

—「ジュナル・デ・ダム・エ・デ・モード」を中心として—

○大澤香奈子*、木岡悦子** (*京女大・院, **京女大)

目的： 女性にとって装うことはどのような意味や価値をもつものか、女性と服飾という切っても切れない関係を「ジュナル・デ・ダム・エ・デ・モード」(以下「J・D・M」)から探る。特に1830～1832年フランス・パリにおける王政復古期、社会がロマン主義に覆われた時代を対象として、ファッションプレートにクローズアップされた女性をとらえる。

方法： 「J・D・M」のファッションプレート(1830～1832掲載の216点)を対象に服飾に象徴されたエレガンスや女性観を、バルザックの貴族意識やモード観などから検討した。

結果： この時期は七月革命を迎えて人々の生活意識は転換期にあり、産業革命による生産・流通面の発展がパサージュを生み出し、服飾がより身近なものになったと思われる。ファッションプレート(no.2938)には、当時も貴重であったレースやカシミアへの憧憬の念が強かったこと、「une conversation」には、本を読む女性のインテリジェンスを見取ることができる。いずれのファッションプレートも高級素材や重厚な刺繍などが描かれた絢爛たるものだった。当時の貴族社会を生きたバルザックによれば、「服装はまさに人間そのもので(略)人間の象形文字である。(略)つねに服装が最も雄弁に人を語る」とある。華々しいモードは女性が男性の権力を体現する飾り人形であったがゆえに生まれたのであろう。女性の美への欲求は「男の看板」として生きるにとどめなかったと考えられる。社会革命と産業革命の混沌とした時代、しかも男性上位の社会において、女性もまた自らの美意識を満喫し、存在を意味付けるためにも豪華と優美を競い合い、大いにモードを謳歌したであろうことを「J・D・M」を通じて覗き知ることができた。